

# 春のスケッチ

〜定年の夜に〜

作／栗木 英章

〈登場人物〉

伊原 正夫	家電メーカーの技術者	定年
敏子	その妻	ホームセンターパート
三井 利恵	その長女	雑誌記者
勇次	利恵の夫	運輸会社事務員
伊原 登	次男	自動車会社期間工
真弓	私立保育園の保育士	
佐田課長	伊原正夫の上司	
橋本 和代	その部下	CAD係
小出 留美	同じく	庶務係
山崎 三郎	無職	
有香	その妻	敏子と同職場の後輩
加藤さん	近所の主婦	

〈場所〉

伊原家居間を中心に

〈とき〉

三月後半の夕方から夜にかけて

伊原家の居間と庭

わずかばかりの花の手入れをしている敏子。時々、物思いにふける。

遠く雷のゴロゴロ音が聞こえる。

上空を見やってから敏子は居間へと上がり、テーブル上に広げた用紙（離婚届）をじっと見つめる。

音楽―

決心して、ペンを手にした瞬間―

拍手と共に高台の一隅に明かりがシフトする。

佐田

：以上、縷々（るる）申し上げた通り、伊原正夫さんは数々の新製品を開発して市場に売り出し、まさに我が社の家電技術者の中核として活躍し続けられた次第です。ここに定年としてお送りすることは、めでたい事ではありませんが、逆に社にとっては大きな痛手であり、心寂しい限りです。何はともあれ、伊原さんの第二の人生に幸いあれと願いつつ、歓送のご挨拶と致します。

「カンパイ」の声などと共に、再び伊原家の居間。

後方薄明かりの中を正夫はゆっくりと歩く…音楽。

居間では利恵がテーブルでパソコン操作をしており、勇次は新聞を読んでいる。

(笑い)

∴。

(なおも笑い続く)

何よ。

サラ川(せん)。

?ああ—

「呑み会で 妻を気遣い 早帰り」

貴方も少し見習ったら。

「子ども去り 飼犬去って 妻が去る」超リアル。

ちよつと、そんなことより用意したものを貼ってちよつと。

用意した—ああ、定年おめでとう、な。

—勇次は紙袋から巻紙を出して、壁などに貼る。

「お父さん 定年おめでとう!」「長い間のお勤め お疲れ様でした」

—奥より敏子の声

「ちよつと、運ぶの手伝ってちよつと」

はあい。(利恵を見るが反応がないので、フットワーク軽く奥へ去る)

—利恵の深いため息。

やがて、敏子と勇次が料理をお盆に乗せて運ぶ。

敏子 利恵。

あと一息なの。

すごい料理。芋の煮ころがしにキンピラ。久しぶりにおふくろの味です。

ごめんなさいね、大したことできなくて。

いえいえ、最高、ですよ。

—電話が鳴るので敏子が出る。

勇次 ちよいと一口、と。(ツマミ食いして)うまい!(利恵と目が合う、が—)

敏子 もう勇次さんたち待ってるんだからね。うん?お父さん、もうすぐ着くでしょ。

送別会抜け出してくるって言ってたから。∴はいはい、早くね。(切る)いつも遅刻なんだから。

勇次 次も運びましょうか。

敏子 お願いします、ね。

—二人、奥へ

利恵

…ともあれ、関電前で持続する反原発行動は、即製政党が主導するものでなく、子どもの未来を憂う主婦たちの思いが込められた新しい市民運動と言えます…

—再び勇次と敏子が持ってきた料理をテーブルに並べる。

利恵は端っこに移動する。

勇次

そうそう、お義母さんの方もおめでとうございます。

敏子

あら？

勇次

ホラ、県が公募していた「我が町ストーリー」入選。

敏子

…ああ。

勇次

ぼくの両親も新聞発表を見て、すごい！って驚いてましたよ。

敏子

そんな。それこそ両親にはいつも悟がお世話になって申し訳ない。

勇次

初孫が可愛くて仕方ないんですよ。今度も、日曜日まで預かるからのんびりしておいでって—

敏子

まあまあ。

勇次

コップ持ってきます。(奥へ)

敏子

ふふ…呑まない者は気がまわらなくなつて—

利恵

甘やかしすぎて困っちゃう。

敏子

バチがあたるよ。

利恵

入選作って、映画化もされるの？

敏子

それが入選三作全部じゃないみたい。

利恵

へえ、いつ決まるの？

敏子

今週中に監督が選んで電話くれるって。

利恵

そう。(作業を続ける)

敏子

…そうって—

勇次

(出て来て) お義母さん、すみません。コップ一つ割っちゃいました。

敏子

さわらないで。クリナーで始末するから。(奥へ)

勇次

やっちゃった。

利恵

うちの、百均コップだから。

勇次

そ、でも—(奥へ)

利恵

(時計を見てあせる)

—外へ登と真弓がくる。

真弓

(すぐ家へ入ろうとする登に) 待ってよ。

登

遅れてるんだぞ。

真弓

だって、こんなままでお祝用の笑顔なんてできないでしょ。

登 利恵姉もおまえも、いつも愛想ないから平気平気。  
真弓 (登の頬を軽く叩き) 能天気!  
登 何!?  
真弓 期間工クビになって、社宅も追い出されるんですよ。  
登 …まあ。  
真弓 4月からどうするのよ。  
登 だから、この辺でアパートでも借りて—  
真弓 遠い!私、今の保育園、続けるからね。  
登 そうか—  
真弓 そうかって、私の収入で暮らしてくんではよ。  
登 …うん、ま、当面な。  
真弓 簡単に働き口、見つかる時期(とき)じゃないでしょ。父親になるんだからね。

—内で、外の雰囲気に気付いて—

利恵 登、登でしょ、何してるの?  
登 ほ—い。(真弓に) 入るぞ。よっ久しぶり。  
利恵 真弓さんは?  
真弓 こんにちは。  
利恵 いらっしやい。どうぞどうぞ、上がって。  
登 おじやまします。  
利恵 いやあ、おやじへのお祝い、幾ら包めばいいのかなあって—  
利恵 いいわよ、退職金もらった人にお金なんて—

—敏子と勇次が出て来る。

敏子 いらっしやい。  
真弓 おじやまします。  
敏子 わざわざ、ありがとうございます。  
真弓 (野菜を出して) これ、実家で獲れたので、あの、こんなものですみませんが。  
敏子 まっ、助かるわ、新鮮野菜。  
登 (勇次に) 義兄さん、久しぶり。  
勇次 よっ、水素で動く燃料電池車、七百万円で発売って、調子いいねえ。  
登 まあ—  
勇次 ベースアップ、期待できるんだろ。  
真弓 この人、期間工なんです。しかも—  
登 真弓—  
敏子 さあ、座って座って。  
登 主役は?  
敏子 もうそのあたりまで来てるわ。

登 わかるの？  
勇次 そりゃ夫婦も30年以上やってると――

――この会話の中で、歩いて帰宅する正夫に明かり。タクシ―の去る音。

正夫 たく、タクシ―はどうして停まる寸前にメーターが上がるんだよ。(尿意をもよおし、隅っこへ行きつつ)へえ、ここらでも結構、星が見えるんだ。

――まさにその時、近所の御婦人が――

加藤 あーら、伊原さんのご主人じゃございませんこと。

正夫 (あわてて)あつ、こ、こんにちは。ちよつと星を――あの――

加藤 町内の加藤です。

正夫 ええ――と

加藤 ホラ、コメダの横の――

正夫 ああ、あの加藤さん、どうもどうも。

加藤 奥様には、いつもお世話になって――

正夫 いえ、こちらこそ――

加藤 奥さん、すごいですね。

正夫 はっ？

加藤 県のナントカ賞をおもらいになったんでしょ。

正夫 えっ？ああ、まあ――

加藤 それでね、婦人部ももっと活発に文化活動を行っていかうと話し合ってるんですのよ。新町内会長さんに是非、婦人部の予算を増やしていただきたいんですの。

正夫 …はあ。

加藤 三役で前向きにご相談くださいね。

正夫 わかりました。近いうちに――

加藤 お願いしますよ。(走り去る)

――正夫はため息をついて、再びもよおそうとして「あつ、ミミズ！」と叫んで思いとどまり走り去る。

伊原家の居間で――

登 おつ、エビスビール。

勇次 ふふ…、今日ぐらいね、発泡ビールでないヤツをつて。

登 残念、車なんでノンアル。

利恵 (パソコンを閉じて)よし、送信完了。

真弓 すごいですね、親娘(おやこ)そろって――

利恵 ううん、小っちゃなタウン誌の記者だから知れてるわ。

登 早く、おやしー

—正夫が帰宅

正夫 ただいま。

—一同が「お帰りなさい」「おめでとうございます」「お疲れ様でした」等々の挨拶。

勇次 さつ、では早速、乾杯といきますか。

正夫 ちよつと、トイレ。(奥へ去る)

登 ふふ…、おやしー。

真弓 一つの会社で定年まで勤めるなんて、すごいことね。

登 そりゃ時代が違うから—

真弓 本人の性格よ。

—ほかの面々も、登、真弓のぎくしゃくした関係に気付く。

勇次 まあまあ。

利恵 うん？

勇次 お義父さんの定年祝い、—お義母さんの入選祝い。さつ、乾杯の用意を—(缶ビールを開けて注ぎ合う) あっ、お義父さん、どうぞどうぞ。

—正夫も輪に入り、準備が整う。

正夫 いやあ、みんなそろってくれて、ありがとう。おかげで何とか無事、勤め上げることができたよ。

敏子 ご苦労様でした。

—一同、再び「おめでとう」「お疲れ様」など言葉をかけつつ乾杯する。

利恵 父さんの開発した新製品って幾つくらいあるの？

正夫 送別会でも聞かれたけれど…十五くらいかな。

登 大したもんだ。

正夫 そうだ、(と言いつつ、持ち帰った袋から箱を出し、荷を開けつつ)これが4月発売の新製品さ。ジャーン、と。

利恵 電気釜!?

真弓 可愛い!

正夫 二合炊き。いやあ、今まで三合以上に焦点を合わせてたけれど、50%以上が一回に二合しか炊いていないことがアンケートでわかってね。

勇次　そこに焦点を当てた新製品、核家族を意識して、すごいですね。うちもほしい！

正夫　上が取り外せて、こうすれば卓上でおひつのように使える。

勇次　こりやヒット間違いなしですよ。

正夫　それに、IH式だからかまど炊きのように――

敏子　（さえぎって）貴方――

正夫　うん？

敏子　ほんとに、お疲れ様でした。

正夫　ま、そりやいいよ。で、かまど炊きの良さは、炊き火がまわりから包み込む――

敏子　（低く、しかしキツパリと）私も、本日をもって定年とさせていただきます。

正夫　うん、ああ、ホームセンターを、か。そりやまあ、長いこと続けたんだから――

敏子　（書類を出して）私の署名と捺印は済ませてあります。

正夫　（見て）何、離婚届！？

――一同、驚きの反応

正夫　ちよ、ちよっと――

一同　どうして！？

正夫　えっ！？冗談だろ。

敏子　（首を横に振り）ここ二、三年ずっと考えておりました。

（利恵　お母さん！（登と同時に）

（登　おふくろ！（利恵と同時に）

正夫　なぜだ、何が不満で――あつ、これから、あれか、俺が毎日家に居るのが耐えられないってやつか。

敏子　全て私のわがままです。ごめんなさいね。

正夫　心にもないこと言うな。

利恵　母さん、一体何が不満なの？

登　そりや言うべきだよ。

敏子　：それがね…特にまとめて言うほどのことではないの。とにかく家を出て、一人になりたいの。

利恵　もしかしたら、応募した作品が入選したから、文学少女の夢に翼がはえちゃったとか？

敏子　そりや一つのきっかけだろうけれど…違うの…その、胸の中のモヤモヤが…どうしても納まらないの。

登　おふくろ、おばあさんの介護を永年続けて来て、ホラ、今年初めの三回忌で気が抜けちゃってさ、ふらふら――と。

正夫　そりや、お前がよく尽くしてくれたことには感謝している。最期は「敏子さん、ありがとう」って、手を握りしめて――

敏子　違うんです、どれもこれも。残りの人生、私のしたいようにさせて下さい！  
勇次　まあまあお義母さん、この、特別な席ですから、明日でもゆっくり話し合っ



真弓 お義母さんには、先延ばしできないのよ。決断したのよ。女には、そういう時があるの。

登 おい、真弓――

敏子 (立って) みんな、ありがとうね。これから、お父さんとこの家をよろしくお願ひします。(正夫に) 貴方、明日はお義母さんの月命日です。御花とお供えは用意してあるけれど、お布施の方、いつもの額で頼みますね。

正夫 おい！(立ち上がって、敏子の腕をつかみ) よりによって、俺の定年の日に、どういふつもりだ。俺が今まで毎日、どんな思いで働き続けてきたかわかるか。今夜は、今夜こそ、お互いにご苦労様と言い合って、しみじみ過ぎず時じやないのか！それをいきなり離婚届だと。ふざけるな。納得なんかできるわけないだろう。こうして皆そろってるんだ。ちゃんとわかるように説明しろ！

敏子 …いくら話しても…わかってもらえないでしょうから。

正夫 バカにするな。わかるか、わからないか、まずは話してみる。勝手は許さん(手を上げる)。

敏子 ごめんなさい！

利恵 やめて！(分けて入り) お母さん、どこへ行くつもり？ 心配だから、それだけ――

敏子 友だちのところ。落ち着いたら必ず連絡するから…だって、まだ処理しなくちゃならないことが色々あるし…正直、自分を持て余して、いっぱいいっぱい…とにかく、今夜はこのまま行かせて――ごめんなさい。

――間  
――敏子は急いで去る。雷音。続いて音楽。

正夫 敏子！

――間

近所の犬が吠える。

いつの間にか、日はとっぷりと暮れる。

正夫 何なのだ、ありやあ。

勇次 まっ、とにかく呑みましよう。(ビールを注ぐ) エビス、エビスの大黒様。

利恵 なに？

勇次 なにって…何かいいことあるようにとおまじない。うちのばあちゃんの。  
真弓 あ…おばあさんの三回忌終わって、しばらくホッとしたいのは――

正夫 …ホッとしたいのは俺だ。四十五年、働き続けてきたんだ…

利恵 でも…それは母さんもあいこでしょ。

正夫 よりによって、定年の今日とは――

登 その、今日を逃したら、また平凡な毎日が続くと思って、やはり今日だ、と。平凡のどこが悪い。ほとんどの人間が平凡な毎日をまじめに生きてるのだ。

登 そりゃ、そうだけれど…

真弓 きちっとした働き口があって、家族が暮らしていければ、それでいい。それがいいのよ。

登 イヤミか。

真弓 別に—

登 まずは、どこかバイトでも探してだな。

真弓 その前に住む所よ！

利恵 どうしたの？

真弓 この人、期間工、クビになっちゃったの。

勇次 えっ、ト—ヨ—自動車を—

登 クビじゃない。契約期間終了だ。

真弓 同じことじゃない。

勇次 へえ、いつも新聞に期間工募集って載ってるのに—

登 三年経つと給料上げる契約だから、それ以上延長がなくなって新規採用を繰り返すんです。

勇次 汚い。売上台数世界一の大企業が—

真弓 新車も無理やり買わされて、バツカみたい。

登 もうやめろ。

真弓 …（皆に）ごめんなさい。

利恵 父さん—

正夫 うん？

利恵 （カバンから小冊子を取り出し）母さんの作品、読んだ？

正夫 …いや。

利恵 どうして？

正夫 その、ここんところ忙しくってな。

勇次 そりゃ定年前は、何かと。だから仕方ないだろ。

利恵 そう。貴方もほめる割には見出し程度しか読んでない。

勇次 そのうち—うん、明日の土・日にでも。

利恵 他の入選作は大須観音とか、犬山城とか、名所を書いていけるけれど、母さんは、

ここに、この町を描いているの。（ページをめくり）「…木々のざわめきを聞きな

がら林の外へ出ると、まばゆいばかりの朝日。私は思わず夫の手を握り、住み

慣れた黄金色（こがねいろ）の町を眺めました…」きつと、在所の実りの頃の

風景と重ね合わせてたのね。

私も、そこのとこ、ジンとききました。

利恵 父さん、朝の散歩を二人でしたことあるの？

正夫 …よく誘われたが…朝、早くてな。

勇次 忙しい仕事が残ってるもんね。

利恵 忙しいって…心を亡くすって書くの。

勇次 …へえ。（手のひらに書いてみる）成程。

正夫 —正夫は小冊子を手取る。

勇次

利恵 平凡が大切というのは、毎日努力して、はじめて感じることだと思う。

―間。 利恵は庭へおりる。

勇次 寿司、いただきますか。せっかくの上寿司だから。この中トロ、うまそう。

登 うん、腹へった。

真弓 たく。

登 どうせ喰うんだろ。ゴチャゴチャ言うな。

―真弓は登の頬を叩く

勇次 まあまあ、エビス、エビス…（止める）

利恵 どの花も、もう咲くばかり…母さん、大切に手入れしてたもの、ね。

―そこへ、正夫と同じ職場の橋本和代と小出留美が花束を持って訪れる。

和代 こんにちは。

留美 伊原正夫さんのお宅でしょうか？

利恵 はい、そうですが―

留美 私たち、伊原さんにお世話になった者ですが―

利恵 会社の方（かた）、どうぞ入って。どうぞどうぞ。

―利恵は二人を中へ導く

二人 おじゃまします。

正夫 おお、橋本さんに小出さん。

和代 すみません。おくつろぎのところ―

正夫 構わん、かまわん、身内の席だ。（一同に）二人には会社で色々親切にしてもらってな。よく来てくれた。

―皆、口々に「そりやどうも」「ありがどうね」などの言葉

和代 いえいえ―

留美 伊原さん、花束忘れて中座されたものですから―

正夫 いやあ、もらい慣れないモノ、いただいたもんだから、つい―ありがどう。

―正夫が受け取ると、自然と拍手が湧く

勇次 わざわざその為に？

和代 …口惜しいんです。  
正夫 まっ、二人とも上がって。  
登 そうそう。

和代 (かまわず) 会社は名前の通った大手の電機メーカーなのに、サービス残業が  
当たり前の前ほどのひどい職場だったんです。  
勇次 ブラック企業!?

和代 はい。

留美 特に和代さんたちはCAD(キヤド)のオペレーターだったから、ホント、毎日  
終電車―

和代 そんなとき、伊原さんが社長に直訴してくれたんです。

勇次 直訴!

登 おやじが?

正夫 いやいや、たまたま社長が社員全体に、意見があれば何でも言ってくれと、ツ  
イッターコーナーを公開したから、ちよつとその実情を―

和代 結局、工場長の汚い成果主義が明らかになって、サービス残業もほぼなくなっ  
たんです。

真弓 よかったじゃない。

登 やるじゃん。

和代 ところが、ね(留美)。

留美 そう、ほとぼりが冷めた頃、伊原さんは主任から一担当に降格されて、今の課  
長が昇格したのに、今夜の送別会でも一言も触れないんです。課長になれば、  
定年後の天下り先も用意されたのに…(泣く)

正夫 ありがとう、ありがとう。実は、私は開発の仕事が好きでね。管理職になるよ  
り今のままがよかったんだよ。

利恵 父さん

正夫 うん?

利恵 カッコつけすぎ。

真弓 そうですよ。もう一度、社長にメールすればよかったのに―

正夫 ふっ、あれは…一度だけの奇跡なんだよ。

勇次 さあ、一緒に乾杯を―

留美 タクシ―に待ってもらってるので―

和代 突然すみませんでした。

二人 ありがとうございます。

正夫 こちらこそ。気をつけて、な。

―正夫は二人を見送る。

和代 また、ハードテク教えてください。

正夫 ああ。

二人 おやすみなさい。(去る)

正夫 おやすみ…  
利恵 母さんに見せたかった光景、ね。

—間

正夫 この町でも、こんなに星がきれいだと帰り道に気付いた—  
利恵 初めて空を見上げたのね。  
正夫 ああ、そうらしい。

—利恵のパソコンのメール受信音。

勇次 利恵、何かきているよ。(利恵と正夫は中へ)  
登 姉貴、すごいな。いや真弓の保母の仕事も大変だけれど—  
真弓 すごいと大変は意味が違うの。  
勇次 まあまあ、女性は偉いってことで—

—パソコンを見つめていた利恵は茫然とする。

勇次 どうした—  
登 姉ちゃん—  
利恵 タウン誌の目的は、運動じゃなくて市民—  
勇次 えっ？(覗き込んで) 記者のやるべきことは、名古屋城本丸御殿とか、蒸気機  
関車街中を走るとか…

—利恵はパソコンを閉じて涙ぐむ。

—遠く雷のゴロゴロ音。ブリッジとなり、場面は変わり、冒頭の送別会と  
同じスペースを利用して、敏子の後輩の山崎有香のアップトとなる。  
入口に立つ敏子。

有香 ほんとに出てきたんだ。すごい。  
敏子 そうよ、何か不都合でも—  
有香 ううん。さ、入って。狭くてゴチャゴチャしてるけれど—  
敏子 おじやまします。(奥を気にする有香、入口の男靴を見て) 誰かいるの？  
有香 う、うん、ちよっとね。いいのいいの。気にしなくて。たすぐどこかへ翔(と)  
んでつちやうから。  
敏子 ご主人？  
有香 といえるかどうか。三年ぶりにひよこって—  
敏子 そう、知ってれば私—  
有香 いいって。しばらくの間だから。

敏子 私もほんの一時期のつもりなのよ。

有香 わかってます。何年の付き合いだと思ってるの？ごはんは—  
敏子 すませてきた。

有香 じゃ、お茶でも。

敏子 かまわないで。

有香 (お茶を入れつつ) でも、よく実行できたわね。我らがやさしき敏子先輩が—  
敏子 ふふ…

有香 後悔してない？

敏子 そんな…頭は真っ白。まだ震えがおさまらない。

有香 三十年以上の夫婦だもんね。

敏子 …

有香 そうそう。三日前だったかしら、駅でご主人の姿、見かけたわ。

敏子 そう—

有香 丁度にか雨が降ってきたときでね。一人のおばあちゃんが途方に暮れてたら、  
ご主人、自分の傘を貸してあげて、さっと雨ん中、走り去ってった。おばあち  
ゃん、御礼の頭下げてるうちに、ね。

敏子 …そう、大事にしてた傘を…

有香 いいところあるなって。別に、だから何だってことじゃないのよ。

敏子 (お茶を飲んで) おいしい。

有香 実家が静岡だから。せめてお茶だけでも、ね。

—しばらく各々の思いでお茶を飲む。

敏子 私ね—

有香 私たち— (同時に)

—その時、カーテンを開けて、シャワー上がりの山崎が腰にバスタオル  
を巻いて顔を出す。

山崎 お前も入れよ。おっと失礼。

有香 ちよつと!

敏子 おじやましてます。私—

有香 職場の先輩の伊原さん。さつき話したでしょ、いつもお世話になってるって。  
山崎 こりやどうも。じゃ俺、奥で横になつとるわ。  
有香 いちいち、いいから—

—山崎は一度引つ込めた顔を出して

山崎 あのさ、余計なことだけど、夫婦なんて結局、腐れ縁だよ。一緒にベッドに入

つちやえば、たいていのことはどうってことないのさ。俺なんざホームレスになる寸前に、やっとこ気づいて―

有香 やめて！

山崎 はいはい。では、ビールでも呑んで、と。(消える)

―敏子、立つ―

有香 待つて！私はそんなつもりじゃないのよ。仕方なかったの。

敏子

有香 敏子さんが来てくれるのはわかってたし、あの人が突然帰ってきててもドアは開

けなかったわ。そしたら、ドンドンと激しく叩いて、近所の手前、開けざるを

得なかったの。許して―

有香 いいのよ。こちらこそ無理言っちゃって、ごめん。(帰ろうとする)

敏子 帰らないで！私も色々話したい。

有香

敏子 このままドロ沼のような暮らしにもどるつもりはないの。

有香 また、昼休みにでも、ね。

敏子 今夜、泊まるところ、あるの。

有香 おやすみ。

敏子 敏子さん―

―敏子はゆっくりと去る。 辛い思いで見送る有香

山崎 (顔を出して) 帰った…百点満点の亭主なんかいるもんか。早くシャワー浴び

て、こっち来いよ。

―有香は山崎の頬を叩く。

山崎 おい―

有香 この三年、どんな気持ちでいたと思うの。

山崎 …そりゃあ―

有香 後ろ指さされながら必死に働いて、その時、敏子さんはいつも相談にのって

くれたの。抱けば女はどうにかなる？なめないでよ。あんたは女の…人の気持ち

がわからないのよ。

山崎 …すまん。

有香 出て行って―

山崎 来たばかりだぞ。

有香 あんたは、悩んだ末ここへ来てくれた私の親友を追い出したのよ。さあ、すぐ。

山崎

有香 でなかったら、敏子さんを連れ戻して！

山崎　なあ、明日落ち着いたら（抱こうとする）  
有香　（突き放して）すぐに！  
山崎　わ、わかった…追いかけていくよ。

—山崎は外へ走り去る。  
有香は（まわりへ）「騒がして、ごめんなさい」と謝りつつ…泣き崩れる。  
—明かりは伊原家へシフトする。　電話—

勇次　ぼく、出ます。（出る）はい、伊原ですが…はっ？  
登　ビール、ビールと（奥へ）  
勇次　今、ちよつと外出を—はい、はい。そう伝えればいいんですね…わかりました。  
どうも、どうも。（切る）  
誰、何？  
利恵　お義母さんの作品、映像化から外れたって—  
勇次　三作ともは無理だったんだ。  
勇次　予算削減で一本だけだと—

—間。　登が二枚の紙片とビールを持って戻る。

登　冷蔵庫の横に、これ貼ってあったよ。ええつと、高血圧のためのレシピ—つと  
…週間献立表、か。

—利恵は用紙を奪うように取って見入る。

真弓　お義父さん、血圧高いんですか？  
正夫　ここんところ、下がったけれど、な。  
利恵　行きましょ。  
一同　？  
利恵　母さんを迎えによ。  
正夫　でもなあ、どこへ—  
利恵　今、この町を一人歩いてるのよ。父さん、平気なの（用紙を渡す）。  
登　よし、車出す。  
利恵　お願い。  
正夫　…悪い、な。  
勇次　ぼく、ここで電話待ってます。  
真弓　私、ここ片付けてます。  
勇次　（行きかける登に）登くん、当面、うちの会社で運転しないか。  
登　はっ、求人あるんですか。  
勇次　頼んでみる。ちっほけな運送会社で手当ても安いけどな。  
登　助かります。じゃ、父さんたち、乗って—（外へ出る）



正夫 みんな…すまん。

利恵 ありがとうございます。

真弓 ありがとうございます。

勇次 いいな、いいな。

利恵 ？

勇次 ありがとうございます。

利恵 もう—

勇次 気をつけて。

真弓 登、運転だけは任せて大丈夫。

—クラクションの押さえた音

利恵 行ってきます。

—利恵と正夫は去る。

勇次 見つかるといいな。

真弓 ほんとうに。

勇次 (レシピーをあらためて見て) お義母さん、やさしいんだ。前からそう思ってたけどさ。

真弓 ふふ…

勇次 うん？

真弓 私も、多分、利恵さんも…そう やさしい方じゃないですから。

勇次 そりゃあ、いやいや、そんなことないですよ。ええ、ま、残ってる分、呑みましょ。

真弓 私、これで—

勇次 えつ、強い人が一口だけ？

真弓 来週、医者に行くんだけど—

勇次 どこか具合—あつ、もしかして赤ちゃん？

真弓 多分—

勇次 そりゃ、おめでとう！(と、ついビールを注ごうとする)

真弓 だから—

勇次 あ、そうか。

真弓 どうぞ。(缶を受け取り注ぐ)

勇次 どうもどうも—

真弓 ありがとう。

勇次 ありがとう。

—二人の笑い。

勇次 生まれてくる命に乾杯。

真弓 …でも—  
うん。

真弓 これから生まれてくる子どもたち、幸せになれるかしら？  
勇次 だって、そりゃあ—

真弓 今回の世の中の動きを見てると不安—  
う—ん。

真弓 …  
勇次 戦後七十年ですからね。

真弓 ええ…  
勇次 逆に考えると、その、七十年前までは戦争やってたんですよ。

真弓 ええ。

勇次 そう見詰められると詰まっちゃうけれど…一世紀、百年単位で考えたらどうです。ぼくたちの子ども子ども、つまり孫の世代にどうなってるか…だから、（立ち上がってくるくる回りつつ）つまり、ぼくたちのおじいさん、おばあさんが手渡してくれた現代を、よりよい時代に果たしてできるか。つまり、つまり、それはひとえにぼくたちにかかっていると—はは…慣れんこと言ううとダメですね。

真弓 いいえ、他人事じゃなくって自分たちで努力しろと—

勇次 え！？そんな偉そうなこと言いました？

真弓 はい。保育士の組合の書記長も、よくそう演説しています。

勇次 まいったなあ。

真弓 勇次さん、いつもと印象が随分と違いますね。

勇次 いつもと、ああ、いつも隣りに利害がいるでしょ。

真弓 はい。

勇次 劣等感—

真弓 ほんとに！？

勇次 ほんとにほんと。

真弓 へえ。

勇次 ここだけの話、いい？

真弓 はい。

勇次 頭のいい女性、苦手。

真弓 でも、勇次さんだって—

勇次 彼女がよくぼくを選んだなって。あとで色々聞いた話を総合すると、不倫が壊れて、絶望していた時に、人畜無害なぼくと出会ったって訳。

真弓 信じられない。

勇次 真弓ちゃんもね、あんまり登くんを責めちゃだめだよ。

真弓 わかっているんだけど、保育の仕事がきついから、つい—

勇次 他人（ひと）を責めるときにはね、ちよこつと逃げ道をつくつといてあげるの。

真弓 …（こっくり頷く）

—電話のコール音

真弓

私、出ます。(出て) はい、伊原ですが…もしもし、もしもし…お義母さん!？お義母さんでしょ。今、お義父さんたちが探しに行ってます。今、どこにおみえですか…見通しのいい所で立って、もしもし、もしもし…(切る)

勇次

きつとお義母さんだな。  
見つかるといいけれど…

真弓

—ゴロゴロという雷音(ブリッジ)

二人は不安な顔を見合わせる。

舞台一隅の街燈下で、携帯電話を切って佇む敏子に明かりがシフト。

街のノイズ。子どもが駆け去る。

遠く救急車の走行音。

—雨がポツン、ポツンと落ちてくる。

—長い間

敏子

(つぶやくように) ♪雨降りお月さん雲の蔭…

—山崎が追いつく

山崎

ふう、やっつと追いついた。

敏子

(一瞬、驚くが、それと気づいて) あら—

山崎

山崎です。さっきは事情もよくわからないのに、わるかった、です。

敏子

いいえ、こちらこそ、突然おじゃまして—

山崎

いや、おみえになることは聞いてたんですよ。でも、俺も…情けない話、公園も追い出されて行くところになってさ…ま、自業自得なんだけど—

敏子

有香さん、いつもあなたのグチをこぼしながら、最後は涙ぐんで…ほんとはあなたを、三郎さんが戻ってくるのを待ってたのよ。

山崎

…まったく…俺って男は—

敏子

戻って、よく話して…ふふ、これは私に言えることよね。大丈夫、有香さんには電話しておくから。

山崎

すまん、です。(一礼して走り去る)

—雨音、だんだんと激しくなる。

ハンカチを頭上にかける敏子…やがて、そっと近づいた正夫が傘をさす。

利恵と登も現れる。

登

やっぱり姉貴の言った通りここだった。

利恵

母さん!(敏子を抱きしめる)

敏子 (強く) やめて、離して！  
利恵 ううん、お母さん…母ちゃん…  
敏子 ばか！  
利恵 ばかは母ちゃん。(離れる)  
登 …我が家はみんなばかさ。

—間

登 おふくろ、ごめんな。  
敏子 (登を見つめる)  
登 いつまでも、ふらふらしていて—  
敏子 二人とも…いい子だよ。  
利恵 もう大人。  
敏子 …そうね、ふふ…  
登 実家へ帰れば、いつもおやじとおふくろがいて…これからも、そうであってくれよ。  
利恵 …母さんには、母さんの思い描いた人生があるはずだから、二人でよく話してね。  
登 車の中で待つてるから。

—二人は車の方へ去る  
長い間。低く音楽—

正夫 読んだよ、あんたの作品—  
敏子 …ああ。  
正夫 あの道は、おふくろの墓参りへの道だな。  
敏子 (頷く)  
正夫 いつも庭の花を生けてくれて—  
敏子 …言つてよ。  
正夫 ?  
敏子 あんた、じゃなくて、おまえ何考えてるって—  
正夫 おまえ何考えてる。  
敏子 その先。  
正夫 おれは、四十五年働いてきたんだ。毎朝五時半に起きて—  
敏子 ええ。  
正夫 そりゃ、その前におまえは、いつも起きてたけれど—会社じゃ年下の課長にアゴ、じゃない、メールで一方的に指示されて走り回っていた…(口惜しい)  
敏子 …私もパートだけれど、働いてきました。  
正夫 そりゃわわかってる。帰ってくれば、メシはつくってあるけれど、おまえはたいがい机に向かっていた。

敏子 夕ごはんのお付き合いはしてきました。  
正夫 それぞれ。テーブルに座ってても、お前の心は机の上の原稿だ。  
いつもいつも――

敏子 ……夢だったの。小さい頃からの――  
正夫 文学少女なんて、ゴマンという。みんなそんなガキの頃の夢追っかけてどうなる。  
敏子 じゃ、あなたの夢はなかったの？

正夫 ……  
敏子 伊原正夫さん！

正夫 そ、そりゃ、まあ木工仕事が得意だったから、おふくろたち年寄りが座りやすい椅子を一個一個、手作りするとか――  
敏子 続ければよかったのに。

正夫 次第に時間もなくなったし……第一、経済効率のないそんな夢、追えるわけないだろ。

敏子 ……経済効率なんかで、はかれないから、夢なんですよ。

正夫 ……夢を持たずに毎日どう生きていくの。

敏子 子どもじゃないんだぞ。

正夫 大人でも持つべきよ、あなたも私も、まだ二十年も三十年も生きていくのよ。

正夫 ……三十、年……

――長い間

敏子 ……ごめんなさい。えらそうに――

正夫 ……初めてかな、こういうケンカ。

敏子 ケンカじゃない。

正夫 ……そうだ、な。

――雨が強くなるので、正夫は再び傘をさす。

正夫 庭で、雨蛙が啼いてたからさ。

敏子 私……嫌いじゃないのよ、雨。

正夫 ……へえ。

敏子 小学校のとき、昼から雨が降ると、母が鉄工所抜け出して傘持ってきてくれたもの。雨の夜は母を一人占め……

正夫 おれだって――

敏子 何？

正夫 いや。

敏子 言いなさいよ。

正夫 強いな。

敏子 だって、いつも黙っちゃうんだもの。

正夫 ……映画好きのおやじに連れられて、よく映画を見に行った時代劇。

敏子 チャンバラ？

正夫 そう…。市川 右太衛門が月形半平太をやってさ。「春雨じゃ、濡れて参ろう」

なんて—ふふ…

敏子 それで帰りにマネしながら帰ったんだ。

正夫 うん…アイスクャンディなめながらな。

敏子 ……戻らないね、時は—

正夫 ……戻らないから…これからが大切なんだろ。

敏子 あら—

正夫 家に帰ってくれる、か。

敏子 ……

正夫 今夜、近くで加藤さんの奥さんに会って言われたよ。

敏子 うん？

正夫 新町内会長さん、婦人部の予算増やしてくださいねって。

敏子 そりゃその通りよ。

正夫 会社人間だったから、町内のことは、さっぱりわからん…その…慣れるまで半

年、半年でいいから、そばにいてくれ。

敏子 半年でいいのね。

正夫 だから、それはさっきの今だから遠慮してで…一年。

敏子 一年、ね。

正夫 おい！

敏子 子どもが待ってる。先に行って。

正夫 戻ってくれないのか。

敏子 ……もう少し、考えてから。

正夫 ……そう、か。

敏子 ごめんなさい、ね。

正夫 いや…待ってる。(傘を渡す)

—正夫は敏子を見つめ、そして去る。

クラクションの音

敏子

(ケータイをかける) 有香ちゃん、私…ご亭主が汗かいて追ってきてくれたわ…ううん、いいのいいの。私も少し冷静になってきて…うん、多分ね。また職場で話しましょ…そう、そうね。まず連れ合いとの話ね。じゃ、おやすみ。(切る)

—町のノイズ

敏子はゆっくりと歩き始める。いつの間にか雨は止んでいる。

—暗転。以降、各々に姿を現わし、消えていく二人組。

真弓 ほんとにお義母さん、戻ってくる？  
登 多分、今夜中に。  
真弓 ならいいけれど。  
登 ああ…女って—  
真弓 何、しみじみと。  
登 思い切った行動をするな。  
真弓 そうよ。  
登 そうよって、真弓は—  
真弓 私たち親になるのよ。  
登 親、か。まだ信じられないな。  
真弓 勇次さんのところで、がんばってね。  
登 ああ、来週面接だ。気合い入れて行くか。  
真弓 入れ過ぎて、ドジ踏まないように、ね。  
登 うん…ニューtral、ニューtral。あつ、荷物持つ。  
真弓 ありがと。(渡して) さあ、仕事とアパートさがし！

—二人は肩を並べて車の方へ去る。  
やがて車の発車音。

—パンと手を打つ音と共に勇次と利恵。

勇次 これにて一件落着。  
利恵 まだよ。母さんの悩みは深いわ。  
勇次 深い闇を乗り越える熟年の夫婦愛。  
利恵 —たく。  
勇次 なに。  
利恵 そのお気楽さがうらやましい。  
勇次 ちよつと、パソコン、ビニール袋に入れた方が—  
利恵 大丈夫。防水型のケースだから。  
勇次 あつ！  
利恵 今度はなに？  
勇次 お義母さんに、映画化ダメになった件、伝えてなかった。  
利恵 大丈夫。父さんが伝えてくれる。  
勇次 だね。  
利恵 もうはじめから承知してたみたいだし。  
勇次 へえ…女って…  
利恵 何よ。  
勇次 潔くはやくいんだな。  
利恵 私は執念深いわよ。

勇次　こわあ―  
利恵　苦労してまとめた原稿、ボツになんかされてたまるもんですか。  
勇次　熱い。  
利恵　もてあます？  
勇次　いえいえ、プラスマイナスでちょうどいいさ。  
利恵　とつちがマイナスよ。  
勇次　おっ、雨止んだ。  
利恵　ねえ。  
勇次　駅前でパチンコやってくか。(先へ走る)  
利恵　バカ。(追いかける)

―再び伊原家。

一人座ってお茶を飲む正夫。

離婚届を破ろうとするが、玄関の気配に思いとどまる。

敏子がそっと入ってくる。

(「おい」と言おうとして、つい) うん。

損しちゃった。パート手当三時間分。

…何で。

ここまでのタクシ―代。

タクシ―、あれだろ、停車する前にメーターがカチンと上がる…うん、ありがとう。

(正夫を見つめる)

いや、その…戻ってきてくれて―

(庭を見渡し) 今年も咲くといいわね。

何だって？

もう一つのサボテンの花。

ああ、月下美人ってやつか。

一生に一度だけ、美しい花を咲かせる。

―音楽

正夫　(ポツンと) 明日、散歩行こうか。

―敏子には聞こえなかったようだ。

庭を見続ける敏子

いつの間にか星が出ている。

音楽が少しずつアップする中で―

〈完〉



2015年1月31日 受信

劇団名芸の長田と申します。  
劇団代表・栗木に代わり、標題の脚本原稿をお送りいたします。  
ご査収ください。

※ 台本レイアウト修正（護柔）